



秋田に散在する負の歴史の痕跡

著者	李 修京
雑誌名	東京学芸大学紀要. 人文社会科学系.
巻	74
ページ	16-26
発行年	2023-01-31
その他の言語のタイトル	Traces of Grievous History Buried in Akita
URL	http://hdl.handle.net/2309/00174501

秋田に散在する負の歴史の痕跡

李 修 京*

アジア言語・文化研究分野

(2022年8月30日受理)

要 旨

本稿は戦時中の秋田地域で発生したいくつかの負の歴史について概括したものである。筆者は2021年秋に北海道各地に残る負の歴史とそれらを追悼する市民活動の事例調査の帰りに、以前から気になっていた秋田県の田沢湖などに眠る悲しい歴史の現場に赴いてみた。2011年2月に初めて訪ねた田沢湖の透き通った水面と山々の自然を撮影し、様々な授業や講演会で紹介したことはあったものの、実際その湖の底に流れる歴史について触れる場面は少なかった。再び田沢湖の湖畔に立ち、限られた時間の中で深く掘り下げることには限界はあるものの、美しさの背景にある悲しい歴史の中の犠牲者たち、そのような歴史とともに平和の具現を追求しながら今を生きている市民たちの活動について確認したいと思ったのである。本稿はその思いの一環から書いたものである。

本稿には2022年6月に韓国語で出版された『在日コリアンの社会形成と時代的表象』の中に収められている拙稿「近代日本の帝国主義への歩みと戦後平和志向の市民力―市民たちの朝鮮人労働者の記録と追悼」(ソウル, 博文社, 111～114頁と149～160頁)の一部を加筆・修正し、日本語訳したものも含まれていることを断わっておきたい。

キーワード: 田沢湖, 姫観音像, 玉川導水路, 生保内発電所, 花岡七ツ館事件, 花岡事件

はじめに

周知のように秋田県は、2009年に放映された韓国の人気ドラマ‘アイリス’のロケ地として知られる田沢湖や、角館の武家屋敷、秋田犬やお米の生産地などで有名な所である。壮大で美しい山々と透き通った湖の景色や豊かな食文化などに魅せられ、多くの観光客が訪れる場所¹でもあるが、その根底に流れる悲しい歴史の記憶にも注目したいのが本稿の趣旨である。

2021年9月から筆者は、北海道における負の歴史と市民活動による歴史総括と平和的共生への動きを調査するため、北海道に散在する戦時労働の痕跡や犠牲者を追悼し、不幸な戦争の繰り返しをしないことを願いながら市民活動として行っている行事の場を訪ねた。明治時代からの悪名高い‘囚人労働’‘タコ部屋労働’などが現代の技能実習生の中でも発生している²というニュースに接しつつ、近代国家形成以後の帝国主義から軍国主義に暴走する過程で国民の犠牲を強要し、戦後はその歴史の修正や美化、国家主義の体制有用性ばかり重んじ、国際社会、特に過去の被植民地国家との交流さえ壊している昨今の外交関係に警鐘を鳴らしている、

* 東京学芸大学 外国語・外国文化研究講座 アジア言語・文化研究分野／東京学芸大学 連合学校教育学研究科 (184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1)

‘命の尊厳’と‘平和’意識を実践する‘市民力’に出会いたかったのである。そのため、北海道の調査から東京に戻る2021年11月4日、青森港から秋田の田沢湖に向かった。深い山道が続く約240Kmの長距離運転で田沢湖に着いたのは深夜、近くの宿に泊まった後、翌日は早くから姫観音像など、いくつかの歴史の痕跡が残る場所を訪ねた。

筆者がヨーロッパでの研究専念期間から戻った直後の2011年2月、秋田県での講演に招待された際、現地の在野研究者たちから田沢湖や姫観音像と玉川導水路、生保内発電所周辺や旧花岡炭鉱や犠牲者たちのお墓などを案内して頂いたことがある。当時、分断国家の韓国と北朝鮮の諜報員の間で繰り上げられるスパイアクションドラマの‘アイリス’の空前のヒットでロケ地の秋田は脚光を浴び、韓国からの観光客が急増したと喜んでいた地域住民の姿が印象に残っていた。その方々から、雪山と神秘的な湖に映る美しい風景の中に潜んでいる様々な戦時動員労働者の話を聞いた。歪んだ時代の犠牲になった人々を記憶し、悲劇を繰り返さないために市民たちが反戦と平和を祈る追悼祭を行っているという話に、改めて歴史が明日の鑑であることだと思ったものである。



写真1 左は田沢湖，中央と右は一つの株から7種類の木が出ている‘七種木’³。
2021年11月5日撮影。以後、同様。

1. 仙北市田沢湖に立つ姫観音の意味と生保内発電所

魅力的な自然環境が多い秋田だが、戦争末期の花岡鉱山七ツ館坑道陥没事件や花岡事件、生保内発電所建設時などで命を失った朝鮮人や中国人労働者の悲しい歴史も市民たちに記憶されている。限られた時間のため、筆者はさっそく共同研究者らと追悼慰霊祭を行っている田沢湖の姫観音像がある場所に向かった。

日本は1937年7月に勃発した日中戦争のため、総力戦体制が進む中、需要の拡大による電力不足が深刻であった。特に軍需物資の生産に欠かせない電力確保のため、石炭の増産と発電所建設に国の力を集中していた。同年、東北振興電力株式会社が設立され、1938年2月16日に生保内発電所の建設工事に着手する。上流の川を日本で最も水深が深い田沢湖に繋ぎ、その湖の水を利用する水路式水力発電所であった⁴。

1940年1月19日に営業運転を開始する生保内発電所に水を引くためには、玉川と先達川から田沢湖まで、そして田沢湖から生保内発電所までの三つの導水路を作らなければならなかった。玉川導水路は1.86Km、先達川導水路は4.03Km、田子の木主水路から発電所までの導水路は2.51Kmであった。



写真2 左は姫観音像の説明看板，中央は姫観音像，右は田沢湖ダムの入り口標識。



写真3 左側は玉川導水路、中央は田沢湖発電所の説明看板、右側は2021年11月3日に
在日韓国人2世の河正雄氏が平和を願って建立した田沢湖の‘ふるさとの碑’と‘平和の群像’

この発電所は高さ49.6mの落差の、秒あたり75m³の水量で発電するもので、最高出力は31,500kwであった⁵。この導水路および周辺インフラ工事に朝鮮人労働者約2,000人が動員され⁶、工事はすべてシャベルやつるはしなどを使った手作業で行われた難工事であったため、冬の酷寒や発破事故による死傷など、危険な工事過程で多くの労働者が犠牲となったのである⁷。

一方、1937年頃に地域住民は玉川の酸性河川水が田沢湖に流入されることで、田沢湖だけに生息していた固有種の国鱒が壊滅するという意見書を政府に提出するようになり、その魚たちを慰めるという趣旨で1939年11月に玉川導水路の流入口の横に姫観音像を建立するようになる。名目は固有種の国鱒への慰霊であったが、過酷な労働によって異国で理不尽にも亡くなった朝鮮人労働者たちの慰霊の意図が内在していることは建立趣意書の最後の部分で確認することができる。この趣意書は戦時下の時代状況が表れているといえるが、「秋田の地を楽土にしようとして1936年に東北興業会社と東北振興電力株式会社が創立され、1937年に発電所工事に着手したという経緯と、主に田沢湖の伝説である辰子の犠牲的精神が高く讃えられ八紘一字という理想下での大乗的日本の精神を発揮し、国策に順応しながら田沢湖の異変やこれに関する憶測や流言飛語などが郷土の伝来の信仰を破壊するようにはっきりと自暴自棄する流民たちが増えることを案じて、これらを抑えて信心を以て民心を落ち付かせる意図から姫観音像を建立する」⁸という内容とともに、榎湖仏教界の発源主4人と後援者である田沢湖周辺の町内の村長4人の合計8人の連名で1939年5月に作成されている。しかし、骨子は以下の写真4でも見られるように、最後のページの附言の趣旨のために建立したことだというのが簡単にわかる。

「この姫観音像の建立されたことを知らしめながらその開眼式を行うことに際しては各会社の従業員関係者として殉職した尊い犠牲になった人、追悼慰霊の照会式も施行して彼らの冥福を祈るのも一緒に行うことを附言する。」⁹

と記述されている。つまり、各工事関連業者たちを通して動員された労働者たちが死んでいくのを恐れていた村長たちが彼らの魂を宥めるために戦時中の物資不足状況にもかかわらず観音像の建立に至ったものと指摘することができる。

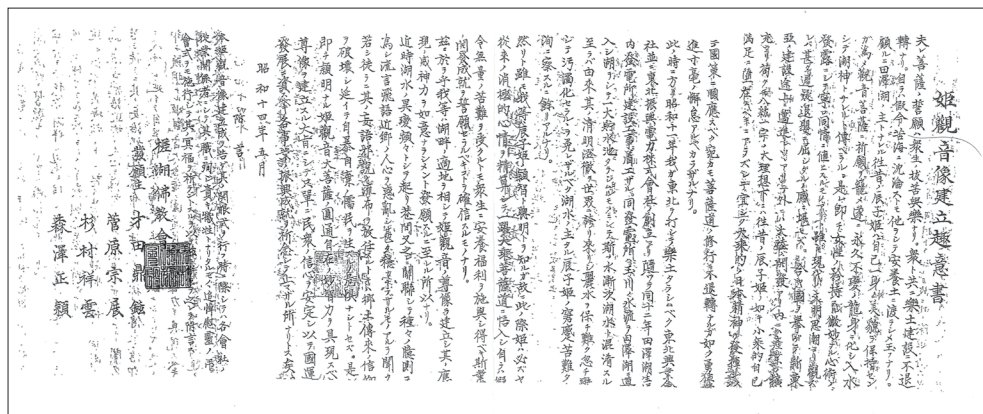


写真4 発見者の河正雄氏によるご提供

この趣意書は東大阪で生まれて生保内で育った在日2世の河正雄（ハジヨンウン、1939～）氏が1985年に姫観音像の趣意看板に疑問を抱き、真相調査を行い始めたことで発見されたものである。河氏は1990年9月23日に第1回朝鮮人無縁仏の追悼慰霊祭を開催しながら田澤寺に慰霊碑を建立し、百済観音と弥勒菩薩の寄贈も行い、今まで奉安室の朝鮮人無縁仏を供養し続けている。その過程で1991年6月12日に田澤寺で姫観音像の建立趣意書を発見したことをメディアに知らせたことで、日韓の市民による本格的な強制動員の証拠調査活動が行われるようになった。その結果、先達川発電所の生存者である曹四鉦翁を探ことができ、秋田の歴史家として知られる野添憲治を始め、日本の放送記者等の調査団とともに韓国の霊岩（ヨンアム）を訪問し、発電所の工事当時の内容の聞き取りを行った。その努力あって、1999年3月2日の秋田朝日放送ニュースの特集放送などで社会に広く知らされるようになったのである。

当時、十字町町長であった西成辰雄さんら秋田県朝鮮人強制連行真相調査団の調査結果、1946年に厚生省が調査した朝鮮人労働者についての調査名簿には秋田の鉦山などに動員された6,800名の名簿（自由募集、官あっせん）が存在するのが初めて明らかになったのである。つまり、河正雄が主張し続けて来たように、姫観音像は生保内発電所関連の労働者たちの死亡者の魂を追悼するためのものであることが立証されたのである。

国家権力の誤った判断で生じた歴史的汚点を、市民たちが真実を明らかにし、未来を共に拓いて行くための‘市民力’を示した事例だといえよう。その追悼慰霊祭の市民活動は今もなお開催され続けている。

2. 花岡鉦山の七ツ館坑陥没事件

田沢湖から約108Kmを北のほうに走って大館市を過ぎれば藤田組が所有していた花岡鉦山の跡が現れる。1944年から本格的に始まる中国人強制連行によって中国から1年ほどで強制動員された労働者986人中、418人が死亡した〔花岡事件〕¹⁰の現場である。

花岡鉦山は鹿島組花岡出張所が運営し、七ツ館坑は同和工業花岡鉦業所が運営していたのだが、後述する花岡事件の直前に起きたのが花岡七ツ館坑陥没事件である。

この事件は、採炭増産の圧力の下、花岡川の下まで地下坑道を掘っていたが、1944年5月29日にその坑道が陥没し、坑内にいた朝鮮人労働者12名と日本人労働者11名が生き埋めとなったことである。この場合、‘事故’や‘災害’という表現より、山口県の長生炭鉦同様、劣悪な労働環境下の人災事件として捉え、研究者は‘事件’と表記する傾向である¹¹。

この事件で朝鮮人労働者1人は救出されたが、残りの22人は生存の反応¹²があったにも拘わらず鉦山区域を守るため坑道を閉鎖し、死体も引き上げないまま川の流れを変える工事を行ったのである。成果や効率だけが求められていた当時の国策企業の野蛮的な対応が前述した長生炭鉦やこの花岡七ツ館でも共通するのが確認できる¹³。その出来事の恐ろしさと続く飢え、連行された時の服装のままの酷寒の中の労働、過労などの奴隷監禁労働を強要された地獄のような日々であった¹⁴。

死亡者名簿を見るとほとんどが韓国の慶尚北道出身者である。即ち、同じ地域で動員されたのがわかる。年齢の多くは20代であり、中には10代と40代もいる。

現場は結局、戦後の露天採掘場所の開発によって遺骨発掘は不可能となり、現場に建てられていた七ツ館弔魂碑は近くの信正寺の墓地に移された。追悼碑の裏には亡くなった朝鮮人の名前が刻まれているが、死亡者の11人の中で3人（崔泰植、林炳山、吳重甲）だけが本名が使われており、名前が未詳の人を除けばあとは創氏改名の形態で刻まれている。例えば、‘山田魯元（朴魯元）’‘江川龍伊（韓龍伊）’‘星山段載（全段載）’などの形であり、彼らは死後も植民地の国民になっている¹⁵のである。

2010年3月11日の『国民日報』には記者が花岡鉦山から約30Km離れた小坂鉦山の徴用者であった金キョンヨンさん（2010年当時83歳、大邱居住）を取材した記事が載っている。数少ない生存者の一人であった金さんは17歳の時に連れて行かれ、1年ほどの労役に従事していたが、常におなかが空いていたと証言している。同じ作業場の徴用者たちは25～6歳前後の年上の人たちであり、“日本語が聞き取れないからと言って、よく殴られていました。主にその兄さんたちが殴られました。その訳が分からずにいた自分に、ある日、日本人の貨車運転手が言ってくれました。‘お前はもうすぐ軍隊に行く。軍人一人確保するのに20年もかかる。ケガさせられない。’”と言っていたのです。”¹⁶

このように、当時は全てが戦争に左右され、被植民地出身者の労働者が日本の代替戦力や代替労働力以下の処遇を受けていたことは今の歴史認識問題に繋がっているのである。

なお、当時、管理運業者であった同和鉱業株式会社の『創業百年史』記録によれば、垂直坑であった七ツ館坑の内部の流水噴出によって坑道が崩壊し、噴出地下水の泥水が一気にポンプ座を覆いながら7番坑道以下を水没させたため、合計22人の殉職者が出たという記録がある。銅鉱山として知られる花岡鉱山は、日中戦争以後、国策会社の帝国鉱業開発株式会社の経営下におかれながら軍需省の直轄下で採炭増産を要求されていた。そのため、より高い成果が求められていたため、朝鮮人や中国人労働者たちは苛酷な労働環境の中で命を繋いでいくしかなかったのである。その陥没事件で22人の労働者が生き埋めになったまま閉鎖され、この事件は、同じ花岡炭鉱で不安に駆られていた中国人労働者たちを動揺させ、[花岡事件]に繋がっている¹⁷。のちに述べる中国人労働者の42.39%が死亡した花岡事件は形式上和解の形を取ったが、花岡七ツ館坑陥没事件の犠牲者および生存者たちに対しては謝罪や賠償も一切なく、遺族たちが遺骨発掘を求めた際、会社関係者は、“もし遺体がある場所に鉱石が埋蔵されてあれば遺体と鉱石両方を発掘できるが、会社側の推定埋蔵量としては経済性がないため莫大な資金を投入することは出来ない”と答えている¹⁸。国策を盾にして採算だけが重要視される戦時中であったとはいえ、企業の答弁は決して人道的で誠実な態度だとはいえないものであった。結局、生き埋めになった犠牲者たちの遺骨は今なお家族や祖国に戻らぬままになっている。

3. 中国人連行労働者の42.39%が殺された花岡事件

1942年11月27日、東條内閣は不足する労働力を補うため、中国大陆から中国人を日本国内に強制連行し、鉱山、ダム建設現場などで強制労働に就かせることを企て、「華人労働者内地移入に関する件」を閣議決定し、1944年8月から1945年5月までの間に三次にわたり38,935人の中国人を日本に強制連行し、国内の鉱山、ダム建設現場など135事業場で強制労働させた。そのうち、敗戦までの約1年間、6,830人が亡くなっている（死亡率17.54%）¹⁹。まさに、中国人や朝鮮人強制連行労働者にとって日本とは‘死の地’であったと言っても過言ではない²⁰。

1944年に強制的に連行されてきた鹿島建設の花岡鉱業所所属の中国人労働者137人が虐待と重労働に耐え切れず死亡しており、花岡鉱山同和工業の七ツ館坑落盤と生き埋め事件がきっかけとなって不安と鬱憤が爆発し、1945年6月30日に中国人労働者たちが蜂起した。しかし、結果は悲惨であった。所謂‘花岡事件’と言われるこの‘絶望的な蜂起は、たちまち、憲兵隊、警察、地元警防団らによって鎮圧’され、拷問の過程で100人以上が殺され、結果的に鹿島組花岡出張所では敗戦までの1年間、418人が死亡（死亡率42.39%）したのである²¹。

戦後、戦争特需を受けた国策企業のほとんどが戦時中の労働者搾取や死亡に対する責任を認めない傾向であるが、花岡事件で多くの中国人を死亡させた鹿島組の後身である鹿島建設は、1995年に生存者11名（団長は耿諄氏）と市民たちが行った訴訟に対し、中国人強制連行・強制労働は国策に基づくものであるが、「企業としても責任があると認識し、当該中国人生存者及びその遺族に対して深甚な謝罪の意を表明する」と企業の責任を認めて、2000年に和解金5億円を支出する²²という戦争被害への回復の動きを見せた。これは花岡に強制動員された986人全員に対する被害補償の一環として、関連者慰霊碑の建立及び追悼、遺族支援活動等のために‘花岡平和友好基金’を設立し、中国の紅十字会に運営を信託する形での和解であった²³。この裁判は訴訟を起こした11人の原告だけではなく、花岡鉱山鹿島組に強制動員された全員に対する和解へのアプローチであった。ただ、これによって国内外の如何なる請求権も放棄するという条件であったため、個人請求権の要求があった場合、中国の紅十字会が収拾する形になった。そして、和解に応じた生存者遺族の聯誼会は、他の生存者・遺族に対し、和解に応ずるように説得する義務を負ったが、それでも応じない者については、その権利を奪うというようなとりきめまではなかった。この件について、2022年の11月25日、内田雅敏弁護士に確認した所、それは法的にできることではなく、この点について誤解があり、和解反対派は和解は個人の請求権を奪ったと批判をしているという。この花岡事件の訴訟が始まると日本人弁護士や市民団体が支援し始め、その努力によって、形式的ではあるものの、初めて5億円の賠償を勝ち取り、和解が成立した。戦時中の企業の被害者への賠償や責任問題を追求することは容易ではないが、市民力が加わることによって、解決の糸口が僅か

にでも見えてきたと言えよう。

戦後巨大化した国策企業はグローバル企業としてのイメージ戦略もあってか、多くが戦時中の責任問題については認めようとしない。つまり、‘人権’‘命の尊厳’‘責任’不在のままが続いている。この問題は、いずれ被害側の成長とともに再び問われることになる想定できる。国家が後ろ盾であった戦時中の事とはいえ、反省と責任抜きのグローバル企業として成長した場合、被害側の経済的余裕ができ、‘人としての権利’意識が高まると、怨嗟に火をつける可能性が高いのである。そういったことを念頭におき、市民活動に劣らぬ企業の歴史総括の努力が求められる。その努力こそ、かつての被害側と加害側の信頼を築き上げ、未来作りに繋がるはずである。

おわりに

美しい風景には必ずそれらを作った人の汗水流した努力や犠牲が潜んでいることを記憶する事は大切である。表面だけを見るのでは全体の真相が見えて来ない。

前述した鹿島組の和解が必ずしも被害者たちの悔しさや怨念を拭い取ってくれる完全な解決策だとは言えない。しかし、過去の非を認めようとしない企業の無責任さから人々を大事にする責任意識への進展があまりにも遅いことを考えると、ほんの少しでも貴重な進展に繋がったことは否めない。

この事案の解決に務めた代理人の一人であった内田雅敏弁護士は、この花岡事件の和解があったからこそ、2009年10月の西松建設の和解（強制徴用者360人に対する2億5千万円の賠償）、2016年6月の三菱マテリアル（下請け2社を入れて3,765人の被害者及び遺族との和解努力、責任という表現を歴史的責任に表記）の和解があり、今後の歴史総括への可能性への示唆を得ることができたと評価している。なお、「歴史的責任」は西松和解で初めて使われたのである²⁴。

花岡事件を担当した内田雅敏弁護士は著書の『元徴用工和解への道 ― 戦時被害と個人請求権』（2020、筑摩書房）で韓国の裁判事例を紹介しつつ、中国は1944年からの短期であったことや人数的に韓半島出身者に比べて少なかったため和解に辿り着きやすかったのではと指摘している。そして、日本と中国との貿易規模など、力の論理に左右される企業の態度にも言及している。このように、巨大企業に、かつての人々の犠牲について振り向かせるためには被害側の国際的・経済的成長が必要かも知れないが、個々人の人権や尊厳回復のためには国境を越える、正義と平和の具現を求める市民力の結束がより肝心で、それが歴史総括への基盤に繋がる種火になると考えられる。

人間の尊厳や理性的判断より国家主義的精神武装が強要され、狂気の沙汰²⁵に駆られる戦争末期の国家暴力による人権蹂躞行為は、戦後も「戦争であったため」という口実で被害者たちを放棄している。為政者たちは好戦的であった自分らの過ちをカムフラージュするため、犠牲者たちの苦痛の忍耐は国家のための美意識の発露だといい、社会的同調を強要してきた。そのような無責任な国家権力が歴史を美化・隠蔽・修正しながら、国際社会における日本の位相を落としていることを認識していない。信頼関係が構築されなければならないグローバル社会において、日本が遅れを取っている根底には、歴史認識の後退から始まっている信頼の喪失があるとみられる。隣国韓国はもはや100年前の弱い国でもなければ、徴用工の個人請求権まであきらめなければならなかった「最貧国」でもない。いまや一流文化大国という自負を持ち、日本と肩を並べるほどの経済力も持っている。アメリカだけで300万を超える韓国人社会が形成されているほど、グローバル社会を舞台に活動するコリアンも多い。そのような国の過去の犠牲者に対して、100年前の物差しを持って対応しようとしている日本の認識だけが遅れている。そこに信頼が生まれるはずがなく、摩擦と葛藤の深い溝と遠い距離感が生じるしかない。

日本には、そういった摩擦を埋め、距離を縮める‘市民力’が戦後の社会を支えてきた。犠牲になった戦時の朝鮮人労働者の亡骸を収めた日本の市民がいて、今もなお犠牲者の慰霊活動をしている日本の市民がいる。被害者の痛みを記憶し、被害者の霊と対話を続ける市民力は、過去の‘是正力’となり、未来を拓く‘創成力’となるに違いない。

筆者が立ち寄った秋田では姫観音像の存在の意義や生保内発電所の導水路工事で亡くなった人々への慰霊祭や田澤寺の法要祭などが1990年以後、行われ続けている。また花岡七ツ館坑陥没事件の犠牲者や花岡事件の

犠牲者を追悼する市民行事が多く、市民たちによって行われている。これらの人類普遍の市民活動によって時代が導かれ、平和な未来が紡がれることになる。

附記

本稿の内容確認のため、筆者は2022年11月14日、川口市の河正雄氏宅を訪ねた。そして、姫観音像建立趣意書の発見経緯などを詳細に聴くことができた。貴重な時間を割いて下さった氏に紙面を借りて厚くお礼を申しあげたい。又、中国語の要旨は本学連合学校教育学研究所博士課程の蔡光華さんの協力を受けた。ここに謝意を記しておく。

注

- 1 令和元年（平成31年）の秋田県の観光統計局の統計によれば、同年の観光地点等入込客数は約3,527万人となっている。『令和元年（平成31年）秋田県観光統計』。<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/51650>（2022年9月11日閲覧。）
- 2 窪田順生「ベトナム人技能実習生リンチ事件が「第二の徴用工問題」になりかねない不安」『DIAMOND Online』2022年1月27日。<https://diamond.jp/ud/authors/58abbd6f7765611bd0c30300>（2022年9月11日閲覧。）
- 3 西木村の案内板にはこの「七種木（なないろぎ）」について、「雨乞石を守るために、松、杉、桜、槐、えごの木、榎の木、梨の七種類の木が一株から自然に生えたものといわれています。」と説明されている。筆者はこの七種木の撮影後、「多文化共生」の象徴的事例として様々な授業や講演などで七種木を紹介している。
- 4 田沢湖の姫観音の斜め前には、「田沢湖発電所（中略）田沢湖の水位が低下すると吐水路の圧力が下がり発電能力が上昇します。田沢湖より取水している生保内発電所とは相関関係にあります。」という仙北市の説明看板が建てられている。
- 5 茶谷十六「田沢湖姫観音像建立をめぐる一東北振興政策・生保内発電所建設・国鱒絶滅・朝鮮人強制連行一」, 2019年11月10日, 田澤寺本堂で開催された姫観音像の開眼80周年記念講演集参照。
- 6 両親が先達川と生保内発電所の労働者であった在日韓国人2世の河正雄さんの執拗な訴えに触発された秋田県朝鮮人強制連行真相調査団の努力により発見された発電所の名簿には、強制動員の307名中299名が全羅道地方出身だと記されていた。『光州日報』1999年3月1日付, 「河正雄アーカイブ」再引用。<https://www.ha-jw.com/memorial/himekannon/>（2022年3月28日閲覧）。なお、2022年11月7日に行われた河正雄氏の証言でも確認している。
- 7 歴史研究者のA氏より地域新聞である『秋田さきがけ』新聞に25人の犠牲が載ったことが報じられたと聞いたが、筆者は未見。
- 8 田澤寺所蔵で在日2世の河正雄氏が発見した姫観音像の建立趣意書を在野研究者A氏の案内によって2011年2月21日に撮影したものを参照。
- 9 同上。
- 10 厚生省の朝鮮人労働者名簿によれば、秋田全域の25の事業所に6,859名の労働者がいた。各自の本籍、生年月日、入所年月日、退所年月日、退所理由（死亡、病、負傷、逃亡など）、賃金、退所時の処遇などが明記されている。土和工業花岡鉦業所に1,978名、鹿島組花岡出張所に130名、合計2,108名が花岡鉦山に動員されていたことがわかる。茶谷十六「七ツ館坑陥没災害報告書—外務省所蔵花岡鉦山七ツ館事件関係資料について」（『韓日民族問題研究』）参照。なお、同氏が秋田大学で発表した「史料紹介 外務省所蔵、花岡鉦山七ツ館事件関係資料について」で事件の詳細や犠牲者の名簿が確認できる。参考サイト。https://air.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=4174&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1（2022年9月12日閲覧。）
- 11 同上。
- 12 トンカチでレールを叩く音があったという証言があった。「나라잃은 젊은이들의 비극(亡国の若者たちの悲劇)」『大田日報』2017年8月13日参照。<http://www.daejonilbo.com/news/articleView.html?idxno=1275723>（2022年9月12日閲覧。）
- 13 山口県宇部市の長生炭鉱については次で詳細が確認できる。李修京・湯野優子（2008）「宇部の長生炭鉱と戦時中の朝鮮人労働者」東京学芸大学人文社会科学系『東京学芸大学人文社会科学系Ⅰ』第59集, 105-119頁参照。
- 14 内田雅敏（2020）『元徴用工和解への道』筑摩書房, 70頁参照。
- 15 「[경술국치 100년] 드라마 ‘아이리스’의 그 호수엔 숨겨진 조선인恨이 흐르고 있었다」『国民日報』2010年4月13日。<http://>

news.kmib.co.kr/article/view.asp?arcid=0003599749&code=11121200（2022年3月28日閲覧。）

- 16 同上。
- 17 内田雅敏（2020）『元徴用工和解への道』筑摩書房，70-71頁参照。
- 18 前掲，「나라잃은 젊은이들의 비극(亡国の若者たちの悲劇)」『大田日報』2017年8月13日参照。<http://www.daejeonilbo.com/news/articleView.html?idxno=1275723>（2022年9月12日閲覧。）
- 19 上掲書，内田雅敏『元徴用工 和解への道』67頁参照。
- 20 中国人が強制連行された135事業場の詳細が次の文献で確認できる。上掲書，内田雅敏『元徴用工 和解への道』68-69頁参照。
- 21 上掲書，内田雅敏『元徴用工 和解への道』70-71頁参照。
- 22 上掲書，内田雅敏『元徴用工 和解への道』91-96頁参照。
- 23 上掲書，内田雅敏『元徴用工 和解への道』94-106頁参照。なお，この鹿島組との動きだが，1990年7月5日に花岡事件中国人生存者・遺族と鹿島建設が共同発表を行い，「国策に基づくものであるが企業としても責任がある。」と述べている。しかし，2022年11月25日に内田雅敏弁護士に確認した所，その後の交渉に進展がなかったため，1995年6月28日に生存者11人と市民たちが鹿島建設を提訴し，2000年11月29日に両側は東京高裁で和解し，「企業としても責任がある」ことを再確認したという。
- 24 上掲書，内田雅敏『元徴用工 和解への道』100-101頁参照。
- 25 長野県松代や長野市の安茂里にある大本営が何を意味するのか，どのような工程でどれほどの労力が使われていたのかを考えると，理性の欠如による暴走行為である戦争が如何に狂気の沙汰であったのかがわかる。

아키타에 묻힌 비통한 역사의 흔적

이 수 경*

아시아 언어·문화 연구 분야

(2022년 8월 30일 접수)

요 지

이 글은 전시체제 중의 아키타현에 있었던 조선인 및 중국인 강제연행 노동자와 관련된 역사의 흔적을 재확인하며 그에 대한 시민 활동에 대해서 개괄한 것이다.

여기서는 특히 드라마 아이리스의 녹화 현장으로 알려진 다자와호수의 히메관음상과 다마가와 도수로, 오보나이 발전소, 텐타쿠지에서 1991년에 발견된 히메관음상 건립 취의서, 하나오카광산 나나츠타테사건 및 하나오카사건에 주목하기로 한다.

이 글에는 2022년 6월에 한국어로 출판된 『재일코리아인의 사회형성과 시대적표상』 속의 줄고 「근대 일본의 제국주의의 행보와 전후 평화지향의 시민력—시민들의 조선인 노동자의 기록과 추모」(서울, 박문사, 111 ~ 114쪽과 149 ~ 160쪽 참조)의 일부를 대폭 수정하여 일본어로 번역한 내용도 포함된 것을 밝혀둔다.

키워드: 다자와호, 히메관음상, 다마가와도수로, 오보나이발전소, 하나오카광산 나나츠타테사건, 하나오카사건

* 도쿄가쿠게이대학 외국어·외국문화연구강좌 아시아언어·문화연구분야 교수 연합 학교 교육 연구과
(184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1)

埋藏在秋田县的悲痛的历史痕迹

李 修 京*

亚洲语言・文化研究领域

(2022年8月30日受理)

摘 要

本文在记载战争期间生活在秋田县的朝鲜人及中国劳动者的黑暗历史的痕迹的同时，概括了其历史痕迹的动向。

本中重点将考察，以电视剧《iris》取景地闻名的田泽湖的姬观音像和玉川引水渠，生保发电厂，1991年在田泽寺发现的姬观音像的建设企划书，花冈矿区南松馆事件，花冈事件等内容。

在此特别注明，本文内容是根据笔者在2022年6月以韩文出版的《在日朝鲜人的社会形成与时代的表象》书中插入的文章“现代日本走向帝国主义步伐与战后面向和平的公民力量——公民对朝鲜劳动者的记录与追悼”（首尔，博文社，111～114页，149～160页），将其部分内容进行补充与修订并翻译成日文。

关键词：田泽湖，姬观音雕像，玉川引水渠，生保内发电厂，花冈矿区南松馆事件，花冈事件

* 东京学艺大学 外国语・外国文化研究领域 亚洲语言・文化研究领域／东京学艺大学大学院 联合大学 教育学研究与语言文化系教育 领域（184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1）

Traces of Grievous History Buried in Akita

YI SOOKYUNG*

Asian Languages and Cultures

(Received for Publication; August 30, 2022)

Abstract

This paper records the negative history of Korean and Chinese laborers in Akita during the Colonial Period and World War II, and summarizes the trends of the historical traces.

In particular, focus on the Himekannon at Lake Tazawa, which is famous for the filming of the TV drama “Iris”, the Tamagawa waterway, the Obonai power plant, and the prospectus for the erection of the Himekannon discovered in Dentakuji Temple in 1991, and Hanaoka Mine Nanatsutate Incident, Hanaoka Incident.

It is specifically noted that the contents of this article is also included on my article “Modern Japan’s Steps Towards Imperialism and Post-War Peace-Oriented Civic Power - Citizens’ Records and Memorials of Korean Laborers” inserted in the book “The Social Formation of Koreans in Japan and Appearances of the Times” published in Korean in June, 2022 (Seoul, Hakubunsha. pp.111 ~ 114 and pp.149 ~ 160), with some of its contents supplemented and revised and translated into Japanese.

Keywords: Lake Tazawa, The Statue of Himekannon, Tamagawa Waterway, Obonai Power Plant,
Hanaoka Nanatsutate Incident, Hanaoka Mine Incident

* Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)



【公開講演会】 多文化共生とダイバーシティ

在日韓国朝鮮文化と多様性について

このたび Korea 研究室では 2023 年度「多文化共生とダイバーシティ」の公開講演会を開催することとなりました。

在日コリアン2世として、美術コレクターとして著名な河正雄(ハジヨンウン)先生をお迎えし、様々な文化活動を通して在日社会と母国と日本の架け橋になって来られた行程や、それらの文化活動から見てきた多文化共生と多様性についてご講演をいただきます。大変貴重なお話が聞ける機会となりますので、万障お繰り合わせのうえご出席くださいますようお願い申し上げます

記

日時： 2023年6月5日(月)16:40～18:20

場所： 本学 N304教室

*学外の参加希望者の方は所属とお名前・連絡先を書いて以下のメールに送ってください。参加方法等をお送りします。

《問い合わせ》

東京学芸大学 李 修京 研究室
skdragon@u-gakugei.ac.jp
(公開講演会 担当者 宛)